



## 新宿区立新宿文化センター

ミュージシャン・□□□(クチロロ) 三浦 康嗣さん

劇場、ライブハウス、演芸場などのエンタテインメント施設がひしめく新宿東口に、新宿区民のためのホールとして1979年に開館した新宿区立新宿文化センター。音楽のまち新宿で開催される都市型音楽フェス「SHIN-ONSAI」(@新宿文化センター)の出演アーティストで、新宿在住のミュージシャン三浦康嗣さんにお話を伺いました。

新宿とは、高校生の時から縁があるんですよ。親の仕事の都合で小学6年生からニューヨークに住んでいたんですけど、高校受験のタイミングで帰国することになって、高田馬場にあった早稲田実業高校(現在は国分寺市)に進学しました。それから早稲田大学に入って3年の時に中退するまでの6年間は、友だちと遊ぶにしてもデートをするにしても、新宿が多かったですね。

高校3年生ぐらいからレコードを集めるようになって、高田馬場のディスクファン、レコファン、新宿のシスコ、ディスクユニオンに通ってました。昔のソウルやジャズ、ダンスミュージック、ヒップホップ、クラシック、その頃はなんでも聴いていたなあ。お店の外に置かれたダンボールで1枚10円のレコードが売られていて、そういうのを片っ端から買ったりして。

当時、新宿にあったライブハウス、リキッドルームにもけっこう行きました。700人ぐらい入るけっこう大きなハコなんだけど、あまり行儀がよくない雰囲気で、「勝手に楽しんで」という距離感が心地よかったですよ(笑)。イギリスのDJ、ロニ・サイズのライブが印象に残っていますね。人力ドラムンベースというダンスミュージックを生み出したアーティストのひとりで、「本当にこんな感じで演奏しているのか!」と驚きました。客席もすごく盛り上がっていたのを覚えています。

2014年には神楽坂に引っ越して、新宿区民になりました。スタジオ兼住居になる物件を探していて、気に入った物件がたまたま神楽坂にあったんだけど、住んでみるとどこでも出やすく便利な街ですね。僕はご飯を食べたり、お酒を飲んだりするのが好きで、自宅に友人を迎える時にはよく料理をします。食材の買い出しも含めて、スーパー巡りが趣味なんです。昨年末、近所にライブができた時は、朝、昼、晩と時間を変えて3日連続通いましたから。「SHIN-ONSAI」の会場、新宿文化センターの近くにあるマルエツにはお気に入りの商品があって、近くで用事がある時は寄りたくなりますね。

最近、特にそう感じるんですけど、新宿に限らず、大きな都市は人も情報量も多すぎて、人を人と認識するとしんどくなるんですよ。飲みに行ってもマーケティング的ななにかが見えて、「人」を感じない。だから、家族や大切な友人と外食する時は、いつも荒木町に行きます。狭い路地のなかに個人店がひしめき合っていて、働いている人の個性を感じるお店が多いし、そういう雰囲気を求めるお客さんが集まる町なんです。荒木町に通うようになったきっかけは、数年前、ふらりと入った「あたぼう鯨」。お手頃な価格なのにしっかりと江戸前の仕事をしていて、すごく気に入ったんですよ。それでよく足を運ぶようになったら、大将がいろいろなお店を



教えてくれました。大将が勧めてくれたスナックは、かつてジャズのライブをやっていたというぐらいに広くて驚きましたね。高齢のママと仲良くなって、そこで3、4回、ライブをしました。そのスナックはもう閉店しちゃったんだけど、いいお店だったなあ。

このスナックライブの時もそうだけど、□□□はメンバーが多くて都内に住んでいない人もいるので、基本的にはコンパクトな編成でライブをするんですよ。僕らが一年に一度、唯一みんな顔合わせるのが、「SHIN-ONSAI」。□□□が参加した過去4回のうち、コロナで無観客になった2021年以外は全員集合しています。だから「SHIN-ONSAI」の時は「久しぶり!元氣?」みたいな感じで、修学旅行とか同窓会みたいで楽しいですね。僕らの出番が終わった後は、楽屋で打ち上げをしながら、ほかのアーティストのライブをのぞいたりしています。

今年は、いつもライブの構成を担当している村田シゲが参加できない可能性が高くて、久しぶりに僕がひとりで考えることになりそうです。せっかくの機会だから、いつもと少し趣向を変えるかもしれません。それも含めて、楽しみにしててください!

### 新宿区立新宿文化センター

休館日:毎月第2火曜日/年末年始 / 新宿区新宿6-14-1  
<https://www.regasu-shinjuku.or.jp/bunka-center/>  
 新宿区立新宿文化センターのイベント情報はP38~41へ

### SHIN-ONSAI 2023

日時:10/7(土)~8(日) 11:30開場 12:30開演  
 会場:新宿文化センター  
<https://shin-onsai.com/>  
 SHIN-ONSAI 2023のイベント情報はP21へ





## 宇野亞喜良の壁画とバー・ルタン

美術家、文筆家、非建築家、映画批評家、ドラッグクイーン ヴィヴィアン佐藤さん

新宿東口は劇場で賑わうエリア。かつて寺山修司の「星の王子様」の公演ポスターなどを手掛けたことでも有名な宇野亞喜良直筆の壁画で飾られたバー「Le Temps(ルタン)」は、演劇人や芸術家が多く集うバーです。新宿の街を「屋根のない美術館」、まさにフィールドミュージアムと例える美術家・ドラッグクイーンのヴィヴィアン佐藤さんにお話を伺いました。

私は仙台出身で、高校まで仙台で過ごしました。それから東京の出版社で3年ほど働いた後、金沢工業大学の建築学部に進学しました。本格的にメイクをするようになったのは、学生時代。アルバイトをしていたショーパブのママが、元祖ドラッグクイーンともいえる方で、私の名付け親でもあるママは「極端なもの」に美しさや面白さを見出す人で、「醜さと美しさは表裏一体」と教えてくれました。

金沢には8年ほど住んでいて、その間に新宿に遊びに来るようになったんですね。それでこの街が好きになって、大学院で博士号を取った後、建築家の磯崎さんの事務所に就職したのを機に、新宿に引っ越しました。私が働き始めた1997年、西新宿の東京オペラシティタワーにNTTインターコミュニケーション・センター(ICC)がオープンして、最初の展示が磯崎さんの展覧会だったんです。私はそこの現場の担当になって、自宅からICCに通っていました。

磯崎新アトリエを2年ほどで辞めた私は、ニューヨークにある「建てない建築家」の夫婦が経営する事務所で働きたくて、渡米しました。「建てない建築」では、建物は雨風をしのぐためのビルディング、建築はアーキテクチャと分けて考えます。アーキテクチャは、ひとつの哲学。だから絵でもダンスでも、ボエムでも成り立つんです。私のヘッドドレスも、「頭上建築」と呼んでいます。

実際、海外には建てない建築家がたくさんいて、私もニューヨークで学びたかったのですが、それほど給料を出せないと言われてしまい、数週間で泣く泣く帰国しました。

そのタイミングで、大きなショーパブのママをやらないかという依頼が来たんです。「お金を貯めてもう一度アメリカへ」と思ってその仕事を請けた後、歌舞伎町でも、六本木でも、銀座でも同じような仕事をしました。でも、いまだにニューヨークに戻れません(笑)

磯崎新アトリエを辞めた後、立場的にはずっとフリーランスなので、仕事がなくって暇なときはよく新宿の街を歩きました。そのうちに、不思議な建物や道がたくさんあると気づいたんです。

例えば新宿3丁目にある世界堂のすぐ横に、めちゃくちゃ細いビルが建っていて、あのあたりはもともと千鳥街ビルという飲み屋が集まったビルだったんですが、1964年の東京オリンピックの区画整理で、新宿2丁目に移ったんです。だから2丁目、「新千鳥街ビル」という飲み屋街があるんですね。そして、昔の街区と新しい街区の境目に取り残されたのが、世界堂の隣りのビルなんです。



意識して見渡すと、新宿にはそういう気になるところがあちこちにあるんですよ。それで本を読んだりスナックで地元の人に話を聞いたりして、歴史を調べるようになりました。通りやエリアを「線」や「面」で捉えたり、土地を縦の時間軸で見るのも楽しいですね。

こんなところになぜ!という驚きでいえば、寺山修司の舞台、宣伝美術を手がけたイラストレーター、宇野亞喜良さんの壁画があるバー「Le Temps(ルタン)」もそう! 4、5年前に初めてきた時、壁一面が宇野さんの手描きのイラストで埋まっているのを見て本当に感動しました。

新宿は、全体を見ても魅力的な街。西側のオフィス街や歌舞伎町、大久保のエスニックタウン、迎賓館や赤坂離宮があるハイソなエリア、そして日本で一番大きなゲイタウンもある。ほかに毛色の違うエリアがいくつもあって、混ざり合わずに共存しているのが特徴です。

私はそういう新宿の在り方にすごく惹かれますね。美術家、文筆家、非建築家、映画批評家、ドラッグクイーンでもある私は「I LOVE 新宿」、そして「I am 新宿」だと思っています。年に数回、新宿の街を歩くツアーを開催しているので、ぜひ参加してくださいね!

### ● Cafe & Bar Le Temps(ルタン)

休館日:無  
東京都新宿区新宿3-31-5 新宿ベガス館 B1F  
<https://tabelog.com/tokyo/A1304/A130401/13095705/>

### ● 市谷の杜 本と活字館

『宇野亞喜良 万華鏡印刷花架 Aquirax Uno Kaleidoscope -Behind the Scene-(後期)』  
イベント情報はP45へ





## 東京日仏学院 エスパス・イマージュ

映画プログラム主任 坂本 安美さん

新宿のプチフランス、東京日仏学院はル・コルビュジェに師事した建築家・坂倉準三の設計した螺旋階段をはじめとする美しい建築物、ライブラリー、美術ギャラリー、そして映画館を備えた文化施設です。映画館「エスパス・イマージュ」で27年にわたりプログラムを企画された坂本安美さんにお話を伺いました。

私が東京日仏学院(旧アンスティチュ・フランセ東京)で開催する映画プログラムの企画や運営に携わるようになったのは、1996年です。

きっかけは、フランス映画でした。私は子どもの頃から映画が好きで、高校生の頃には「監督の名前」で映画を観るようになりました。

最初に好きになったのが、『大人は判ってくれない』、『映画に愛をこめて アメリカの夜』で有名なフランス人監督、フランソワ・トリュフォーです。自宅にあった『定本 映画術 ヒッチコック・トリュフォー』という本を読んだら映画について語る言葉の豊かさに惹かれて、映画を語る、批評するという仕事に興味を持ちました。それで大学生の時、フランスの映画雑誌『カイエ・デュ・シネマ』の日本版の編集部に入りしていたら、映画批評を書かせてもらうようになって。

同じ頃、東京日仏学院にも通っていました。ここは1952年に創立されたフランス政府公式の語学学校・文化センターで、生徒や一般向けに日本で公開されていない、英語字幕だけのフランス映画をたくさん上映していたんです。

そのうちに、東京日仏学院の元院長で映画プログラムも担当していたマリー＝クリスティーヌ・ドゥ・ナヴァセルさんと知り合い、お手伝いするようになりました。映画のプロでもあるナヴァセルさんのもとで、企画を立て、監督など関係者を招聘し、上映するというひと通りの仕事を学びました。2001年、彼女の院長としての任期が終わる時に「あなたが続けて」と言われて、今に至ります。

それからは多い時に毎月1回、最近でも年間7、8回、プログラムを組んでいます。2012年には、フランスの女性監督特集を初めて企画しました。特に若手の女性監督を集めたプログラムで、『それでも私は生きていく』という映画を撮ったミア・ハンセン＝ラヴ監督を招待しましたね。

今年は、ベルギー人の女性監督、シャンタル・アケルマンのプログラムを組みました。2022年に彼女の作品が、イギリス映画協会が10年ごとに選出する「史上最高の映画100」で1位に選ばれるなど、近年、世界で再評価されている監督です。彼女の4作品を上映したプログラムには、高校生も足を運んでくれました。

監督や俳優ではなく、「映画とシャンソン」や「地中海映画祭」などテーマで見せる特集も組んでいます。映画はいろいろな見せ方ができるので、企画のアイデアが尽きることはありません。



映画プログラムでは監督や俳優、映画批評家を招待することも多く、一緒に神楽坂でご飯を食べたり、飲みに行ったりもします。神楽坂は神社があったり、和食や和菓子のお店があったり、昔ながらの日本の文化や歴史を感じられる場所なのですごく喜ばれますね。「夏目漱石がここでご飯食べてたらしいよ」なんて言うと、みんなビックリします。古民家をリノベーションした居酒屋「神楽坂 カド」には、イギリスの女優、ジェーン・バーキンも連れて行きました。

今年の秋は、新作『私の大嫌いな弟へ ブラザー&シスター』が9月に公開され、日本でも大変人気の高いアルノー・デプレシャン監督をお迎えし、デビュー作から近作まで一挙特集します。

フランス映画って小難しいイメージがあるかもしれませんが、アメリカ、ロシアなどいろいろな映画を取り込みながら自分たちの映画を作ってきた国なんです。フランソワ・トリュフォーやジャン＝リュック・ゴダールといった世界的な巨匠もアメリカ映画が大好きで、アメリカ映画がなかったら彼らの映画は生まれていません。

フランス映画の魅力はものすごくハイブリッドで、多彩なこと。きっと、こんな映画もあるんだ!と驚くと思います。ぜひ東京日仏学院のプログラムを観にきてほしいですね。

東京日仏学院  
休館日:月曜日  
東京都新宿区市谷船河原町15  
<https://www.institutfrancais.jp/tokyo/>  
東京日仏学院のイベント情報はP53へ



神楽坂 カド  
営業日:夏季休暇、年末年始を除き、毎日営業  
東京都新宿区赤城元町1-32  
<https://kagurazaka-kado.com/>



坂倉準三設計の螺旋階段